

SDGs・「持続可能な社会」の観点から 日本の熊問題を考える

質問 1

日本の社会では熊と人との共存が大きな問題になっています。このことは SDGs や「持続可能な社会」の観点からどのように考えればいいのでしょうか。この観点は、生物の多様性を保つことの重要性を指摘しています。つまり「生態系のバランスが崩れることは、巡り巡って私たち自身の生存を脅かすリスクであり、生物多様性を保全することは持続可能な社会の必須条件なのです」といわれます。

チャット GPT の回答

とても重要で、しかも「きれいごと」では済まされない問いだと思います。
日本における熊と人との共存問題は、SDGs や「持続可能な社会」を考える際の、いわば核心的な試金石です。

以下では、

- 1 SDGs・生物多様性の原則
 - 2 熊問題が突きつけている現実
 - 3 「共存」をどう再定義すべきか
- の三層で整理します。

1 SDGs・生物多様性の原則から見る熊問題

ご提示の一文――

「生態系のバランスが崩れることは、巡り巡って私たち自身の生存を脅かす」

――は、SDGs、とりわけ

- 目標 15: 陸の豊かさを守ろう
- 生物多様性条約(CBD)
の中心思想を正確に表しています。

この観点では熊は

- 森林生態系の頂点捕食者
- 森の更新・動物相の調整役
として位置づけられ、
👉 熊の排除＝生態系機能の劣化
と理解されます。

したがって理念上は、

- 熊を絶滅させない
- 生息域を維持する
ことは「持続可能性の条件」になります。

2 しかし熊問題が示す「理念の限界」

ところが日本の熊問題は、単なる自然保護論では説明できません。

(1) 生態系が「すでに人為的」に壊れている

- 人工林(スギ・ヒノキ)中心の山林
- 里山の放棄
- 農村人口の激減
→ 熊が本来の餌資源を失い、人里に出ざるを得ない

つまりこれは

👉 自然 vs 人間

ではなく

👉 人間が作った歪んだ生態系の帰結
です。

(2) 被害は「抽象的」ではなく、具体的な命の問題

- 高齢者の死亡事故
- 子どもや通学路への出没
- 地域住民の恐怖と生活破壊

ここで

「生物多様性が大事だから我慢せよ」

と言え、それは倫理的暴力になります。

👉 SDGs は本来、
「誰一人取り残さない」
という原則を掲げているはずです。

3 「共存」をどう再定義すべきか

ここが最も重要な点です。

✕ よくある誤解

- 共存＝熊も人も同じ空間で仲良く暮らす
- 共存＝殺さないこと

○ 現実的な再定義

共存とは「空間・役割・リスクを人為的に再設計すること」です。

① 生息域の「分離」を前提にする

- 山奥:熊の生息を保証
 - 人里:人間の安全を最優先
- 👉 重なり合う「緩衝地帯」の管理が鍵

② 管理捕獲は「生物多様性の否定」ではない

- 無差別駆除ではなく
- 個体数・年齢・行動履歴に基づく捕獲

これは

👉 **生態系管理(ecosystem management)**
であり、SDGs と矛盾しません。

③ 本当の持続可能性は「人間社会の再設計」

- 里山の再生
- 人が関与する森林管理
- 農地と森の境界の再構築

熊問題は、実は

👉 **日本の過疎化・高齢化・林業衰退の鏡**
なのです。

🔑 熊問題が突きつける、SDGs の「問い返し」

この問題は、SDGs に対して鋭い問いを投げかけます。

生物多様性の保全とは、
誰のリスクを、誰が引き受けることなのか？

都市住民が

- 「自然と共生すべきだ」と言い
- リスクは山間部の高齢者が背負う

としたら、それは

👉 ****持続可能性ではなく「不均衡の固定化」****です。

まとめ(核心)

- 熊と人の共存は
「自然を守るか、人を守るか」という二択ではない
- SDGs の本質は
理念を現実にも耐える形へ翻訳すること
- 熊問題は
👉 生物多様性と人間の安全をどう調停するかという、極めて教育的・社会的な課題

もしよろしければ、

- 教育(環境教育・ESD)でどう扱うべきか
- 欧州(オオカミ)との比較
- 「共存」という言葉自体の思想史的検討

といった方向にも展開できます。

質問2 教育(環境教育・ESD)でどう扱うべきかを教えてください。教育の分野で扱う SDGs は綺麗ごとばかりで、現実問題を避けていませんか。

ご指摘はまさに核心です。

日本の環境教育・ESD における SDGs は、「価値教育としては美しいが、現実の摩擦を意図的に外している」という批判を免れません。熊問題は、その弱点を最もはっきり可視化する教材です。

以下では、

- ① なぜ「綺麗ごと」になりやすいのか
- ② 熊問題をどう扱えば ESD になるのか
- ③ 学校教育での具体的な設計原理

という三段階で整理します。

① なぜ SDGs 教育は「綺麗ごと」になるのか

1. SDGs が「目標」ではなく「徳目」化している

学校現場では SDGs が、

- 「多様性を大切にしよう」
 - 「自然と共生しよう」
- という**態度目標**に還元されがちです。

しかし本来 SDGs は、

- 利害の衝突
 - リスクの配分
 - 不可逆的な選択(殺す／守る)
- を含む**政治的・社会的プロジェクト**です。

👉 摩擦を消した瞬間、教育的意味は失われます。

2. 「誰が困るか」を問わない構造

熊問題で本当に困るのは、

- 山間部の高齢者
- 農業・林業従事者
- 子どもの通学を守る家族

しかし教科書的 SDGs は、

- 都市部の安全な場所から
- 抽象的に「生物多様性」を語る

👉 リスクの非対称性を扱わない SDGs は、現実逃避です。

3. 「答えが決まっている授業」になっている

多くの SDGs 授業は、

- 最後に「共生が大切」という結論に到達することが前提です。

これは

👉 思考ではなく同調訓練
になってしまいます。

② 熊問題を ESD として扱うための核心原理

原理 1: 「正解のない問い」を中心に据える

熊問題の本質は、

どこまで人は自然に譲るべきか
どこから人の安全を優先すべきか

👉 この問いには唯一の正解はありません。

ESD は、

- 正解を教える教育
ではなく
 - 判断を引き受ける力を育てる教育
であるべきです。
-

原理 2: 「殺す」という語を避けない

多くの教材は、

- 「管理捕獲」

- 「調整」
といった言い換えをします。

しかし教育では、

👉 「人は熊を殺している」
という事実を直視させる必要があります。

これは残酷さを煽るためではなく、

- 倫理的重み
 - 不可逆性
- を理解するためです。

原理 3: 立場を強制せず、立場を移動させる

重要なのは、

- 「どちらが正しいか」を決めさせること
ではなく、
- 立場を行き来する思考を経験させること

例:

- 山村の高齢者
- 都市の消費者
- 行政担当者
- 熊そのもの(擬人的視点)

👉 これが持続可能性の思考訓練です。

③ 学校教育での具体的な扱い方(実践設計)

1 単元設計の基本構造(中高・大学向け)

第 1 段階: 事実を知る(感情を抑える)

- 熊の生態
- 被害件数
- 捕獲数
- 地域差

👉 まず「可哀想／怖い」を一度棚上げ。

第 2 段階: 利害の衝突を可視化する

- 熊を守ることで誰が危険を負うか
- 熊を排除することで何が失われるか

👉 トレードオフの構造化。

第 3 段階: 選択を迫る課題

例:

あなたが町長なら、
捕獲予算を増やしますか？
それとも里山再生に回しますか？

👉 どの選択にも「犠牲」があることを明示。

第 4 段階: SDGs を「結果として」位置づける

最後に初めて、

- SDGs 15
- ESD の理念
を参照する。

👉 最初に SDGs を掲げないのが重要です。

2 評価の視点(ここが最重要)

×「生物多様性の大切さが理解できた」

○

- ・ 複数の立場を説明できるか
- ・ 自分の選択のリスクを言語化できるか
- ・ 反対意見を理解した上で異議を述べられるか

👉 これは態度評価ではなく思考評価です。

④ 結論:熊問題は SDGs 教育の「踏み絵」

熊問題を扱えるかどうかで、
その学校・授業の SDGs は本物かが分かります。

- ・ 不快な事実を扱えるか
- ・ 結論を急がないか
- ・ 教師自身が迷いを見せられるか

👉 迷いを見せられる教育こそ、持続可能です。

もしご関心があれば、

- ・ 小学校ではどこまで可能か
- ・ MEXT の ESD/SDGs 表現の問題点
- ・ 「価値の押し付け」にならない授業技法

といった点も、より具体的に掘り下げられます。